

## 社会学部創立40周年記念号（別冊）によせて

社会学部長  
高坂健次

2000年度は、学校法人関西学院にとっては創立111周年記念の年であったが、社会学部にとっては創立40周年記念の年であった。1999年度には社会福祉学科が創設され、社会学科もそれに伴ってこれまでのコース制が再編されることになった。これは学部創設以来の制度的大改革である。ちょうどその時に40周年を迎え、これを機会に、これまでの歴史を振り返るとともに、今後の学部のあり方を考え、社会学部のより一層の知的活性化を目指したいと考えた。

2000年1月19日に、社会学部内に「社会学部40周年記念行事実行委員会」を発足させて、計画をたてた。40周年記念行事は、大衆性、共同性、創造性を内なるスローガンとした。「大衆性」によって、教職員のみならず、学生・院生の関心を広く喚起しうるものを目指し、「共同性」によって、他大学や他機関との共同研究やその開拓あるいは異分野交流につながることを目指した。「創造性」では、教育・研究面において創造的な知的刺激に触れること、さらにできれば一定の成果物を出すことを目指した。講演会とシンポジウムを統合する統一テーマは、「現代社会における社会学的知の可能性」とした。

実際のプログラムは、どなたが講演やパネリストをお引き受けくださるかによって確定してくるわけで、大枠が決まったのは1999年度末になってからであった。これといった格別の財政的支えのないなかで、結局、関係各位の支えとご協力により、記念講演会を4本、基調講演と学部シンポジウム、アジア太平洋社会学会大会、留学生調査の実施、を実現することができた。（最終的に実行できた行事の一覧を、末尾に掲げておく）講演会やシンポジウムは、休講措置をとれたわけではないので、是非聞きたいけれども授業と重なって聞けなかったという学生も少なくなかった。ここに、社会学部研究会運営委員会のご配慮のもとに、別冊を刊行することによって、講演とシンポジウムの内容を採録することができた。聞き漏らした学生は、講演等で何がどう話され、話題になったかを誌面を通じて知って欲しい。

4月に行われた上野千鶴子氏の講演については、氏が誌上への採録を辞退されたので、ここには掲載できていない。残念であるが、講演テープは学部で保管し、一定の規程のもとに貸出しも行なっているので、関心のある向きにはそれを聞いてもらいたい。

記念講演会とシンポジウム全体の狙いについて私なりの言葉で述べておきたい。狙いは3つあったように思う。

第一に、40年という学部の歩みのなかで、知に対するスタンスがどのような変化をしたかを振り返ってみたかった（振り返って欲しかった）。第二に、専門として社会学は、どのようなかたちでかは社会の役に立たないといけないと思われるけれども、それはどのようにして可能かを考えてみたかった（考えて欲しかった）。第三に、役に立つ社会学と言っても、右から左に役立つ社会学的知識が手許に転がっているわけではない。役立つためには、世界で起こっていることに対する目配りや教養に加えて、専門性への沈潜も必要であることを再確認しておきたかった（再確認して欲しかった）。

社会学部が創立された経緯については、『社会学部三十年史』に詳しい。学部の歴史については、手近なところでは『関学・社会学ものがたり』（1998年）でも概要を知ることはできる。1960年は、安保騒動を経て、経済の季節に移り変わろうとしていた時期であった。敗戦後から10年余りは「日本」にはいつも形容句を付して「貧乏国・日本」と自称していた。50年代後半からはじまった高度経済成長も60年には加速しはじめていたが、しかし「貧乏国・日本」の集合的記憶はまだ生きていた。社会学部の学生も多くが

「産業社会コース」を選択し、いくぶん図式的に言うと、社会学を学ぶことと「豊かになること」とはどこかで結びついていた。

しかし60年代も終わりにになると、大学紛争が象徴していたように学生や大学院生の間に近代あるいは近代合理主義に対する批判が渦巻くようになった。むろん、学生のなかにもいろいろの考え方があったと思われるけれども、それは一つの時代の潮流となった。社会学を学ぶことは果たしてむしろマスプロ教育の抱える問題や矛盾の解決を先送りにしてしまう結果につながるのではないか。当時、「産学協同」路線は教育の退廃をもたらし、資本主義の延命に手を添えるものでしかないとして、批判を受けた。そうした動きは70年代中ごろまで続いたであろうか。

80年代になると、社会学のなかに「意味」や「解釈」を重視するタイプのものが登場し、視点はマクロからミクロへと移った。また、数理社会学という当時他大学ではあまり講じられていないような科目も登場した。古いタイプの社会運動は退潮し、学生の知的関心も内へ内へと向かっていったように見える。社会学部は創立以来、全国の大学のなかでもひとときわ多彩な研究者を擁してきたが、その多彩さゆえに共通の基盤はあったとしても見えにくい状況が続いたのではないかと思われる。少なくとも60年代までのように、マルクスとウェーバー、それに構造機能主義さえ学べばとりあえずは何とかなるという知的状況は完全に崩壊していった。

今、21世紀を迎えようという時期になって、日本の社会学界には新しい機運が生まれてきた。それは「役に立つ社会学」への希求である。期せずして、ここ一二年、関西社会学会大会でも日本社会学会大会でもそれを主題とするシンポジウムが企画された。すなわち、それ以前はどの社会学理論がすぐれているかとか、どの方法論がすぐれているかということで話が進んでいった。しかし、ここに来て理論と方法の内容の如何を問わず、「社会学が役に立つ」とはどういうことか、「役に立つ」にはどのようなことを考えなければならないかという関心に重点が移ってきたのである。むろん、その前提としては、社会学は何らかの役に立たないといけなのではないか、役に立たない社会学なんて仕方がないのではないかという認識がある。

戦後の社会学を振り返るならば、決して社会学は自らが役に立つことを考えてこなかったわけではないし、実際役にも立ってきた。戦後日本社会の重要課題の一つは「民主化」にあったが、農村社会学（今は、村落社会学と呼ぶ）などはそれに役立つための調査と理論を彫琢していたといつてよいであろう。しかし、80年代以降の日本の社会学は、ふたたび「解釈すること」が中心となって「変革」への意思が弱まってきていたという事実は否めない。しかも、今社会学が役に立とうとしていることは、一般論のレベルでの議論ではない。きわめて、具体的な争点をめぐって社会学が他の学問にはない知見と知恵を提示できることが求められているのである。

社会学部創立40周年記念行事としての講演やシンポジウムのテーマとして「大学の知と社会の知」を取り上げたのは、このような背景のもとであった。社会学という学問は、むろん大学で教育され研究され流通しているわけで、大学の知といつてよい。他方、社会学は社会で通用しているさまざまな知識と接点もっている。ところが社会学を間に挟んで、大学の知と社会の知とがうまく交流しているかという、残念ながらそうではない。何となく、大学の知と社会の知とがばらばらなのである。これは困ったことである。

木田拓雄氏は、学部40年の歴史を振り返るにふさわしい視点と問題提起を示してくれている。学部シンポジウムも、世代ごとのいわば学問体験の違いや学問観の違いなどが表われていて興味深い。大澤真幸氏は、どのような難題をもちだところに解釈してくれる存在としての社会学の崩壊を指摘しつつも、自らがそうであるように、その事態をも解釈の対象とすることに成功している社会学の姿を、身をもって示してくれている。学問（社会学を含む）をやるということは、小さなテーマに30年という歳月をかけるだけの意義があるし、またなければならないということも、大澤氏と鷺田小彌太氏とのやりとりで明らかになった。社会の知と大学の知の緊張矛盾についても、どちらかと言えば大学の知に籠城して社会の知を掬

い上げようとする大澤氏のスタンスと、社会の知に籠城して大学という権威の知に挑戦しようとしている横田恵子氏のスタンスの違いも浮き彫りになっていて、面白い。世間知らずの大学関係者（教職員も学生も）も含めて、せめて「なんとか落伍市民にならないための」知識は必要ではないかという、田畑光永氏の熱い呼びかけも健全である。

社会学が役に立つといってもデンマーク、中国と国情が違えば内容も異なる。中国の国家的大事業にことごとく社会学者が意見を求められるという中国の状況は、少なくとも日本の社会学の現状ではそこまでは考えられないことである。明治以来、日本の社会も社会学も欧米に傾斜してきたこと自体、大きく発想を変えなければならないことは、アジアに関するシンポジウムを今読み返してみてもあらためて感ずることである。

一年間を振り返ってそこから何を学び取るかは、学生一人一人に委ねられている。しかし、この40周年という時期に、そうした重要な問題を考えてみる機会にめぐり合わせたことの意義を感じ取って欲しい。そして、少しでも社会的センスに磨きをかけてもらいたい。

最後に一つ。残念だったのは、企画の全体に学生の主体的な関わりが実現しなかったことである。私が社会学部の学生だった時代には、全学の大学祭以外に学部で独自に「社会学部祭」なるものを開催していた。私の頭にはこの社会学部祭のことがこびりついていたので、学生の手による何かができればそれに越したことはないと考えていたが、そうした企画は一切実現できなかった。次のチャンスには、そうしたことも考えて欲しい。

考えてみれば、知的活性化は別段40周年だから必要だというものではない。大学というところが知の生産と流通をつかさどる専門機関であるかぎり、活性化した知的活動は日常のものになっていないといけないただろう。周年行事の「からさわぎ」に終わらせてはならない。

## 付記

社会学部40周年記念行事実行委員会メンバー

浅野仁（副委員長）、阿部潔（2000年4月1日より）、池埜聡、打樋啓史、萩野昌弘、川久保美智子、ルース M. グルーバル、高坂健次（委員長）、紺田千登史、芝田正夫、芝野松次郎、居樹伸雄、対馬路人、難波功士、野波寛、藤原武弘、藤戸淑子、アラン・プレイディ、真鍋一史、三浦耕吉郎、山本剛郎（副委員長）

記念行事一覧

社会学部40周年記念行事

1. 40周年記念連続講演会

- 第1回 4月17日3限目 上野千鶴子氏 「ジェンダー研究の到達点」
- 第2回 5月24日2限目 木田 拓雄氏 「語り継ぐべきもの—世代の連続・不連続—」
- 第3回 10月19日2限目 ヨアン・ヘンリック・ペーターセン氏「福祉国家の将来—デンマークの場合—」
- 第4回 11月17日2限目 李 強氏「中国における経済格差—都市住民と農民の収入格差—」

2. シンポジウム

日 時：6月9日（金）13：00～16：30

場 所：社会学部2号教室

テーマ：「大学の知と社会の知」

- 1) 基調講演 大澤 真幸氏 「大学の知と社会の知」
  - 2) パネリスト 大澤 真幸氏  
鷲田 小彌太氏  
田畑 光永氏  
横田 恵子氏
- 司 会 大村 英昭教授

3. 特別事業

1) アジア太平洋社会学会大会の開催

①研究発表

日 時：9月14日（木）、15日（金）

会 場：E号館

②シンポジウム

関西学院創立111周年記念行事の一環として、関西学院と朝日新聞社共催

日 時：9月16日（土）

会 場：神戸国際会議場

テーマ：「アジアの若者はどこへ行くのか—試されるアジア的価値—」

2) 関西学院＝西宮市共同シンポジウムの支援

日 時：11月11日（土）

会 場：西宮・プレラホール

テーマ：留学生と異文化交流—カレッジタウン西宮の内なる国際化—

3) 「アジア留学生の価値観に関する調査」

（関西学院大学社会学部留学生調査99実行委員会）